

2020/1/11

(英語教育に関する文科省への提言 その4)

なぜ日本人は英語が喋れないのか。

その、原因らしきものとして、なぜ英語にこうも全人格、全人生の評価を下すような重々しいものをゴテゴテと貼り付けてしまったのか、を突き詰めて考えていくと唐突に思われるかもしれませんが「恥をかきたくない」の「恥」という言葉に行き当たりました。

で、日本人がここでいう「恥」とはそもそも何なのかをあれこれ考えてみたところ、突然ですが日本人にとっての「恥」とは「強すぎる美意識（美学）の裏返し」ではなかろうか？という自分なりの答えが出てきました。

要求される美意識（或いは美学）を達成できなかった時に抱く屈辱感（みっともなさ）、それが「恥」の感情ではないかと。

では、我々日本人にとっての美意識（美学）とは何なのか？どこからやって来たのか？それを紐解く前にひとつ。

実は自分は中学生の頃、剣道部に所属しておりました。

その折の型の稽古やら姿勢の取り方、立ち居振る舞いの仕方などの体験やその後の観察を含めた考察等から、

「そういえば、我が国には剣道はじめ、空手道、柔道、合気道、弓道、長刀術、茶道、華道、香道等やたらと「道」がある。他にも道とは言わないが、俳句、和歌、歌舞伎、文楽、文様、式典、工芸品、書式、美食と食事作法、そして極めつけは切腹、介錯、辞世の句を含めた武士道と世界を驚嘆させた精緻な言語」

で、これらは一体何なのか？といえば、一言

「型」もう少し借りやすく言えば「様式美」ばかりではないか！！

考えてみれば、我が国は万世一系、ほぼ2000年にわたり同じ国が続いている。しかも単一民族（厳密には違いますが）で、単一言語の島国。

そう、このような環境の中で美学が育たないわけがない。美意識が洗練を通り越して、微に入り際にわたって先鋭化されないわけがない。

ここまできて、また別の視点から観察をしてみました。

我が国国民は他人の目を非常に気にする。どう見えているか？どう見られているかを非常に気にする国民性。

場合によっては、自分の最高価値判断、価値基準が自分ではなく「他人の目線の上」にある。まず、これでは不自由極まりないし、他人の目線に軸があるわけだから、自らの中に存在するはずの「自信」が産まれるわけがない。

その伝でいえば、外人と話している折、気になっているのは言葉の通じない目の前の外国人ではなく、むしろ背後からこっそりと「評価選別」しているわが同朋の日本人の目線の方がはるかに「会話を阻む致命的原因」なのではないか？

その論拠として、日本人は日本人のいない山道で外国人に道を訊かれたら、言葉の不自由なものも忘れて、それこそ親切に、あらん限りの方法で道を教える場合が多々ある。

で、以上の2点を突き合せた結果、

「このわが同朋であり、且つ外人よりも他人な、その「他人の視線の正体」とは、いったい何なのか？といえ、相互術縛する、あまりにも高すぎる様式美への美的完成度への要求ではないのか？

「一にして完」「一転非の打ちどころなく」「疎そう無きよう」「完全無欠の様式美」を瞬間に果たせという目に見えぬ強大な圧力がその正体なのでは？」

さらにその根底には、無意識にも自らを「歌舞伎の晴れ舞台で、大見得を切る千両役者」に常日頃見立てている心情。

内なる要求レベルも外からの要求レベルも極めて高い、ほぼオリンピックの会場にでも立っているかのような緊張状態では、リラックスして英語など話せよう筈がない。英語どころか日常生活すらスムーズに過ごせるわけがない」

ところが、ここでまた一転。

しかし、上述の話において、この緊張感に、ある時代までは、我が国国民は耐える力がありました。簡単に言うと、その要求される美学を研鑽によって、保ってきたのです。後者の「自らが歌舞伎役者になる欲求」よりも「求められる美的態度」を優先させて。

ですが、ある時からこの優先順位の前後が変わってしまったようです。

即ち、歌舞伎役者への欲求の方を優先させるようになったのです。

それによって、何が起こったかといえ、その内外（うちそと）で重苦しい過重圧となっている「型を打ち破る」わけでもなく（「まずは、型から」と、型から入り、型から作り始める国民にとって、型の外に出るのが第一義である起業において、その数とレベルで小粒なのは当然と言えば当然です）、中身である研鑽をするのも厭うて、結果、苦肉の策として行ったのが「手抜きして、外の型だけつくる（或いは繕う）」ようになったのです。

簡単な言葉でいうと「見せ掛け」「カッコつけ」「虚勢やこけおどし」をするようになってしまったのです。

それこそ「型」だけ残しての変質。つまり形骸化。

その端的な例が礼儀作法（マナー）の伴わない「美容」或いは真偽のほども確かめないまま連呼される広告表現上の「匠の技」「の達人」「巨匠」「カリスマ」などの言葉の粗製乱造乱発。

ある意味、美容界、広告業界は無意識にも、我が国国民感情を十分にとらえているのかもしれない。

教育界も同様でしょう。まず型から入っています。しかも実際に喋れるかどうかよりも、「大学名」「資格（TOEIC, TOEFL等）」等、型を取ることを優先しています。

（「提言 その5」で後述いたしますが、英語は「型優先の言語」ではなく、基本的に「アドリブ言語」なので、そういった評価の仕方そのものが誤判断のもとでしょう）

そして何よりもまず、その美学を満たすための禁止事項過多、美学を満たすための要求事項が高すぎるか多岐にわたりすぎているようです。

これでは我が国国民である子供達を、同じ大人の我が国国民である「官民諸氏」が総力を挙げて「鎖国したガラパゴス島」の中に封じ込めることをしているような気がしてなりません。